

# 体操のジュニア選手育成

体操界に多くの名選手を送り出してきた関西の名門、清風中学・高校（大阪市天王寺区）体操部の練習場が建て替えのために来春、解体される。円形校舎の最上階にある練習場は、天井の高い中央部にしか鉄棒を立てられず、ピット（着地練習用施設）もなかった。そんな環境から多くの五輪選手が生まれた。解体と聞いてファンや関係者それぞれが、思い起こす感慨はさまざまだろう。

意外に思われるかもしれないが、私の場合、この練習場で思い起こすのはジュニア育成を支えた無名の指導者たちである。清風はジュニアからの選手育成にいち早く着目して、体操界を活性化させてきた体操部でもある。

現総監督の吉田和史さん（53）に、こんな話を聞いたことがある。清風OBである彼は高校卒業後に立ち寄った練習場で、大人でも容易にはできない床の高度度技を軽々とこなす小学生に

出会った。小学生は、やはり清風OBの城間晃さん（61）がチーフコーチを務める民間クラブの選手で、休日を利用して出稽古に来ていた。「自分ができない技を、なぜこんな小学生ができるのか」と度肝を抜かれたという。後に母校の指導者となった吉田さんは、清風高校体操部に入部してきたこの元小学生と再会する。それが後にアテネ五輪の男子体操主将として、28年ぶりに日本に団体総合の金メダルをもたらす米田功さん（37）だった。

吉田さんの話を聞いて、アテネの栄冠は、ジュニアからの選手育成を高校、大学、社会人の指導者たちがバトンをつないで結実させたものだを知った。

取材を進めると、清風が体操界にジュニア育成の大切さを認識させることになったソウル五輪の池谷幸雄さん（44）、西川大輔さん（44）も、米田さんの少年期を指導した城間さんのもとで育った選手だとわかった。

日本男子体操界で初めての高校生代表となった西川さん、池谷さんは、五輪団体5連覇の黄金期を持ちながらメダル獲得さえ危ぶまれていたソウル五輪の日本を団体銅メダルに踏みとどまらせた。西川さんはあん馬で満点。池谷さんは個人床でも銅

## 名門校支えた献身と情熱

あさざわ・えい ノンフィクションライター。昭和39年、大阪市生まれ。関西大学文学部国文科卒業。企業勤務を経てフリーランスのライターとなり、ボクシング、野球、体操競技などスポーツを中心に取材・執筆。著書に『浪速のロッキーを〈捨てた〉男 稀代のプロモーター・津田博明の人生』（KADOKAWA）など。



浅沢 英

たちの多くは、清風体操部に憧れながら、弱小校で体操にいらした無名のアルバイトコーチだった。クラブでの練習が終わると、コーチたちは毎夜のように城間さんの自宅に集まって体操談議に花を咲かせた。その中に小畑秀之さん（50）というコーチがいた。弟もコーチで、彼ら兄弟は当時、体操界を席卷していたソ連、東欧の選手たちの演技を毎日、明け方までビデオで研究していた。「みんな、口を開けば体操のことばかりで、ミーティングなんて必要なかった」と城間さんは言う。そんな指導の中から西川さん、池谷さんは生まれた。

メダルの大活躍だった。ソウル五輪後、日本体操界は当時のソ連に視察団を派遣した。ジュニア育成の現場を研究するための8度にわたる視察だった。この視察は、日本の指導法に大きな影響を与えたといわれる。

日本のジュニア育成は民間クラブを源流に清風の練習場を媒介して発信され、結実したと言っても過言ではない。ではない、城間さんのクラブはいかにしてソ連視察以前の日本で池谷さん、西川さんを育成できたのか。一口に言えば、それは献身と情熱の集積だった。城間さんを支えた後輩コーチ

伝統ある清風の練習場の閉幕に思うのは、無名コーチたちのその後である。城間さんは独立してクラブを設立し、小畑さんは指導力を買われて大学の指導者になった。だが、毎夜、議論を重ねた多くのコーチたちは、体操とはどうに縁が切れている。経営に左右される民間クラブの待遇は決して厚いとはいえない。

清風の練習場は2年後に国内屈指の規模と設備を備えた施設に生まれ変わるといふ。新たな節目に、体操界が今以上にジュニア指導者たちに手を差し伸べてくれないかと願う。無名の体操人へのノスタルジーだけで言うのではない。ジュニア指導の安定を抜きにして、体操界のさらなる発展は語れないと思う。

文化